



TITLE:

<大會抄録>「包公」傳説の演變

AUTHOR(S):

木田, 知生

CITATION:

木田, 知生. <大會抄録>「包公」傳説の演變. 東洋史研究 1983, 42(3): 537-537

ISSUE DATE:

1983-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153906>

RIGHT:

の地を首都とする朝鮮民主主義人民共和國において『高句麗平壤城』という體系的な研究も刊行されているが、少なからず問題があり、再考の餘地は充分あるのである。

本報告ではさらに、東アジア都城史における位置づけと、高句麗國家史の展開における長安城時代の設定に對する見通しにも、ふれてみたい。

「包公」傳説の演變

木 田 知 生

北宋時代の實人物包拯（九九九—一〇六二）は、生前、仁宗の嘉祐元年から同三年まで國都開封府の長官を勤めた。その間のすぐれた行政手腕とその前後の地方官及び中央官僚歷任中の仕事ぶりは、同時代人にも影響を与え、幾つかのエピソードを残す結果となった。その事蹟の數々は、宋代の基本史料といえる『續資治通鑑長編』等の諸史料に窺える。また、死後しばらくすると、今度は、その包拯が話本・雜劇の主人公として、文藝作品の中に登場し、その時々時代の精神のなにがしかを象徴・反映する存在として、人々に記憶されることになった。この度の發表では、近來新たに發見された『明成化刊本說唱詞話』と、小説集『龍圖公案』等を材料に、元雜劇からあとの「包公」像を、その歴史背景とともに明らかにしてみたい。

隋代の府兵制について

氣賀澤 保 規

隋の文帝は、全土の再統一に成功した翌開皇十年（五九〇）、兵士の軍籍から民籍への移行、舊北齊地域一帯に配置した軍府の廢止の兵制改革を實行したが、これは、兵民一致制の確立と軍府の關中方面への集中を促し、唐の府兵制の起點になったとして、府兵制史上とくに大きな意味をもつものであったとみなされてきた。

しかしながら、そのときの詔敕の内容を、當時の状況、兵士や軍府の位置、それらにたいする國家の對應等にも目を向けて捉え返してみると、果して府兵制のあり方を一變せしめるほどの意味をもつものであったか疑問になってくる。そもそも西魏以來の府兵制が、郷兵の結集という形をとって、下からのエネルギーをくみ上げるなかで成立發展してきたとすると、文帝にあって、そうした形をとる兵力の結集の有効性現實性が認識されていてもよいはずである。とすれば、開皇十年における軍籍の民籍への統合も、兵士たちの本來の立場・役割には基本的に變りはなかった、とする方向で解することも可能になる。むしろ本格的な兵民一致の追求は、つぎの煬帝による總管府の全廢、軍府の増設、鷹揚府制の發足といった一連の政策のなかで考えられる必要がある。だがこの煬帝の試みも、結局は貫徹できず、逆に最後は驍果とよばれる募兵に頼らざるをえなかったことを忘れてはならない。

以上、本報告では、開皇十年の改革への疑問を一つの手がかりに